

現代における探検の意義

——とくに人間の本性としての探検

顧問教授 横田 健

探検の目的は次のように分類することができよう。

- (1) 純粋に知的・学術的な目的からするもの。
- (2) 経済的な目的からするもの。
- (3) 宗教的な目的、とくに伝道からするもの。
- (4) 軍事的な目的からするもの。
- (5) 報道の目的からするもの。

探検とは、未踏・未知の地理的な地域を旅行し調査・解明することであるが、それには幾多の危険を伴う。その危険の恐怖をも敗ておかし、遂行するには、大きな努力と勇気がいるが、それに値する収穫があるから、探検家は喜んで、その行にしがうわけである。

(1)の知的・学術的なそれは、人間のもっとも基本的な本性に根ざすものと、私は考える。元来、人間の他の動物と異なり、特色ある性格として好奇心があげられている。これは霊長類の特色といってもよいかもしれない。猿の研究者たちは、若い猿が、猿の仲間でも特に好奇心が強く、『餌つり』をするとき、キャラメルとか人工的な食物を芋やリンゴのような自然食品とまぜて置くと、若い猿が好奇心から、先づ手を出して食べてみるという。「そこに山があるから、登るのだ。」とはエグゼレスト初登頂をしたヒラリー卿の有名な言葉であるが、高山に登る人たちは、未知・未踏の山に登ること自体に喜びを感じるので、なんら経済的

目的など考えていない。多くの探検家は、地球上の未踏の地域を究めること、そして、その地域の実態を識ることに喜びを覚え、探検する。むしろそこに生物学・地理学・地質学・人類学・医学・気象学等との新しい学問的知覚を発見できる喜びは、学者のばあい、とくに強烈である。近代の学術探検の多くは、そうした学者たちによって行なわれた。

戦後の日本の学者が行なった最初の学術探検である、京都大学のカラコルム＝ヒンズークッジ探検(昭和27年)はそれである。隊長の本原均博士は小麦の原生種を求めて、イラン・アフガニスタンを目ざしたし、岩村忍博士らは、中世モンゴル民族の遺民と中世モンゴル語のデキストを求めて、ついに目的を達した。(梅根忠夫著・モゴール族探検記、岩波新書)

西郷栄三郎博士を隊長とする南極探検隊なども学術的・知的目的よりするものである。(西郷栄三郎著・南極越冬記、岩波新書)(2)の経済目的よりするものは、いうまでもない。

ルネッサンスは大発見の時代(Die Zeitalter der Entdeckungen)といわれているが、その先駆をなすコロンブスのアメリカ発見(1492)は、インドへ到る航路を発見するため、球形の地球を西へ廻ることが、短距離と考えたからである。インドは中世以来、宝石や香料などの貴重品の産地と考えられ、とくにマルコ・ポーロの旅記が、黄金の国ジバングを報道し

ていることは、ヨーロッパ人の夢をそそった。

1498年のヴァスコ・ダ・ガマのアフリカ喜望峯廻りのインド航路発見と同様である。

中・南米へのコルテスやピサロの探検、遠征、虐殺は、むしろペルーのインカをはじめとするインディオの黄金の財宝が目当てであり、また、その植民地化と搾取が目的であった。近代のアジア・アフリカをヨーロッパ列強が侵略したのは、ことごとく、そうした経済的探検をパイオニアとしていた。

(3) 多少とも上記のヨーロッパ人の後進未開地域侵略へのつぐないをするものは、熱心なキリスト教の伝道者たちの探検、伝道である。キリストの福音を知らぬ人びとに伝道し、そのよろこびを分け与えたいとの情熱に燃えた多数の神父や伝道者がいた。日本へ来た偉大な伝道者聖フランシスコ・ザヴィエルもその1人であった。

暗黒大陸といわれたアフリカの中核部を暴破した、リヴィングストーンは、そうした伝道者の1人である。

アフリカの聖者といわれたシュヴァイツァー博士を探検家とはいえないかもしれないが、アフリカ・ランバレーネのジャングルで長年の伝道と医療にあたった時を、広義の探検家としてよいであろう。

リヴィングストンの足跡を追って報道するために、アフリカ中部を探しまわって、劇的な面々とけたアメリカの新聞記者スタンレーは、この(5)の、報道を目的とした探検家である。

朝日新聞社の探検記者として高名な本多勝一氏のニューギニア、カナダ＝エスキモー、アラビア＝ペドウィーン等の探検も、こうした報道目的のものである。もっとも、ニューギニアのそれは京大の学術探検の目的の隊に参加したのではあったが、

(4) の軍事的のそれは、おおむね、隠密に、ス

バイ目的で行なわれるので、表に出ないものが多い。しかし、日本に関していえば、日露戦争前の福島安正陸軍中佐のシベリア横断や郡司成忠海軍大尉の千島探検がそれである。

なお、(8)の宗教的なそれには、伝道以外にも、唐の玄奘三蔵のように長安からインドまで、はるばる中央アジアの沙漠やパミール高原の峻険を越えて、仏典を求めに行った僧のごときもある。玄奘の『大唐西域記』は、今から千三百年前の中央アジア探検の貴重な記録である。

現代は、もはや地球上に秘境と呼ばれるようなところは、殆んどなくなってきた。関大探検部が、昭和33、4年ごろ、西部ニューギニアの探検を計画をしていたころは、ニューギニアは秘境のおもかげが濃かった。我々はオランダ大使館やオランダのニューギニア総督と交渉していたため失敗した。

すなわち、インドネシアがニューギニアを自国の領土だと主張し、オランダからの解放を主張し、闘争をはじめていた。東京タワーのすぐ傍にある駐日オランダ大使館へ交渉に赴いた私は、マイヤー書記官から、生命の保証はできないと一蹴されて、すごすご帰って来た。

ところが、その後インドネシア側と交渉して人域を企てていた京大隊は、ニューギニアのインドネシア帰属とともに、すぐ入城した。その記録は本多勝一著『ニューギニア高地人』にくわしい。その後、ニューギニアは急速に観光地化し、とくにオーストラリア領である東ニューギニア、バブアの観光開発は急速である。日本の観光会社が団体を募集し、二週間くらいの旅程で、四千メートルのニューギニア中央高地へ飛行機で団体を送り込みはじめた。我々はすっかり食欲を失ってしまった。むしろ未開発、未踏の地は少なくないのであるが……。

現代では、もはや地上で探検の意欲をそそる地方は、極めて寥々たるものである。むしろ、ヒマラヤやアンデス等には未踏峰もすくしはある。西エジプトやアマゾンやアフリカのジャングルの中などには、行くべきところもありそうだ。しかし、既知の部分から大体その内部で見られるものは、予測がつけられる。

ここで今後の開発、探検が進められるのは、海洋、ことに海底であろう。深海は、何気圧というような、もの凄い水圧があるため、非常に精巧な、特別製の深海潜水艇がなければ、調査できない。水面から、何千メートルも下の海底を探索、採集、ボーリング等をやるにも、特別の船を出し莫大の費用をかけねばならない。

現代世界は、急速な人口増加と、急増する資源消費に伴って、資源戦争、エネルギー戦争の親を呈し始めている。それだけに、大陸棚の油田や魚場等の争いは深刻化している。

その一方で、海底から多量のマンガン鉱が採用の可能性が報告されるなど、海底からの資源採用は技術の進化如何で、すくぶる有望といえる。

海洋面の太陽熱からのエネルギー採取、潮汐、潮流による発電、海藻や魚類の養殖、鯨にかわる南水洋のオキアミの食料資源化等の問題は多い。

日本は海洋国家であるが、海洋研究においては必ずしも世界の第一線をリードしているとはいえない。敗戦後、日本人は海洋発展の意欲をしばら

く失なってしまっていた。これは占領軍の禁止という原因もあった。しかし、いつまでも退勢的であることは許されない。陸上資源が極度に乏しい日本にとって、四国をめぐる海洋の利用こそは、今後生きのびる上に必須の研究、開発課題である。

昭和46年夏、私は韓国へ行き、関大卒業生(十八年大・法)で、ソウルの建国大学校教授曹圭甲博士に逢った。同博士は韓国切っつの海洋関係の国際法の権威者で、海洋関係の国際会議に、何度も韓国代表として出席した人である。本学には海洋学部(東海大学などのような)はないけれども、法学部であろうと経済学部であろうと、また文学部であろうと、それぞれの部門で海洋研究はできるであろう。

われわれ大学で研究するものは、先づ科学的、知的関心から対象にアプローチする。しかし、今後の日本民族の運命、その発展をはかるという実用面からのアプローチを行なっても、決してさしつかえない。わが探検部の若人たちの一層の研究を希望してやまない。

〔文学部教授〕

